（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　陳　　妊　湲

近代中国における伝統的女性像の変遷　－「賢妻良母」論をめぐって－

本論文は、１９００年代初等に、女子教育を振興させる目的をもったスローガンとして維新派の知識人によって用いられた「賢妻良母」という概念の歴史的分析を中心に、その歴史的展開を１９３０年代にまでわたって克明に追跡し、従来の伝統的女性像とは異なる、国家に寄与できる知識と教養を身につけた新しい女性像が展開され、かつそれが伝統化されていった過程を以下の３点において実証した。

第１は、中国における「賢妻良母」女性観の輸入過程をめぐって、東アジア近代女子教育思想からみた「賢妻良母」像の近代性、中村正直の「賢妻良母」像の西欧的起源や梁啓超の女性論と明治啓蒙思想との関連、服部宇之吉と日中間における「賢妻良母」論の伝播とそれらの相互関係を明らかにした。

第２は、『婦女雑誌』（１９１５－１９３１）が全面的に分析され、新しい資質として衛生知識と経済管理能力を備え、国家と社会の一部分としての女性像が形作られたことを明らかにした。また、五四新文化運動時期に「新婦女」論が登場し、「賢妻良母」の伝統化が進められた。

第３は、女性教育活動に携わり、日本留学経験を持つ江亢虎の女性論の変遷が論じられ、彼の「無家庭主義」、世界主義の女子教育、「社会主義は女子から実践すべし」という観点、社会主義からの婦人解放論、など、極めて特徴的な女性論の展開が後付けられる。さらに、江亢虎が、ベーベルと幸徳秋水の婦人論と対比され、「中国の伝統」としての賢妻良母像が出来上がる過程が明らかにされた。総じて、「賢妻良母」論の伝統化が、東アジア規模の比較史的視野を以って明らかにされた点が高く評価できる。

残された課題として、伝統化される「賢母良妻」に対比して論ぜられる新女性論の内容はどのようなものか、歴史的な伝統的儒教的女性論と伝統化される女性像との関連はどのようなものか、などの諸点が存在する。しかし、このテーマは、新たな資料の発掘の下に、稿を改めて検討すべきであり、本論文において明らかにされた「賢母良妻」論の変遷に関する議論をいささかもそこなうものではないと考える。本審査委員会は、上記のような画期的な成果をあげていることを鑑み、本論文が博士（文学）の学位に十分に相当するものであると判断する。